

明珠

龍泉院
參禪會會報

從容錄に学ぶ（四九）

第七七則 仰山隨分

〔示衆〕

衆に示して云く、人の空に画くが如きは、筆を下さば即ち錯る。那ぞ模を起りて様を作るに堪えん。甚麼をか為すに堪ゆ？ ○万松、已に是れ詮索を露わすのみ。条あらば条に攀り、条なければ例に攀るべし。

〔本則〕

挙ぐ。僧、仰山に問う。「和尚、還た字を知るや？」（是れ甚麼の字ぞ？）山云く、「随分に。」（仁に当つては譲らず。）僧、乃で右旋りに一匝して云く、「是れ甚麼の字ぞ？」（已に偏と傍とを見る。）山、地上にて十の字を書く。（更に画と点を書く。）僧、左旋りに一匝して云く、「是れ甚麼の字ぞ？」（半と満と俱に分る。形声と転注と。）山、十の字を改めて卍の字と

作す。（機輪を転す處、智眼も猶お迷う。）僧、一円相を画いて両手を以て托げ、修羅の日月を掌にする勢の如くにして云く、「是れ甚麼の字ぞ？」（細やかに切と脚を看よ！）山、乃で円相を画いて卍の字を囲却む。（天下の衲僧も跳不出。）僧、乃で楼至の勢を作す。（門外の金剛が汝を笑わん。）山云く、「如是如是、汝善く護持せよ。」（空を閑し夢を鎖して、牢く掌に收む。）

今則の主人公は仰山慧寂（八〇三〜八八七）。多くの唐代禅匠たちの中でもとびきり秀れ、世に「小釈迦」と称せられた方です。師匠の鴻山靈祐とともに、後には鴻・仰宗の開祖とされている人。『從容錄』には七、八則も含まれているのですが、なぜか今回が初登場です。

仰山は僧名が慧寂で、洞山や臨済とほぼ同年輩の方。六祖慧能さまと同じ韶州（広東省）の出身で、六祖ゆかりの宝林寺（同省韶關市）で出家。のち百丈の法嗣である鴻山靈祐から大法を受け、江西省の仰山（宜春県）に住して禅風を振いました。明代には『語録』が編集。



仰山の仏法は多彩ですが、特徴といえば仏法の真髓や悟りの心境を円相や文字を描いたり書いたりして教示

すること。唐代の禪門では珍しくないのですが、仰山の場合はこうした機縁がきわ立っています。この「仰山隨分」の則はそんな典型。

だいたい、中国は文字の国。むかしから書物は無尽蔵です。象形から亀甲文字を経て漢字、そして現代まで三、四千年の歴史。だから文字は大切にされ、日本のように「大丈夫」のような転用や「出鱈目」などのアテ字は用いず、本来の意味を重んじるのが原則。また、高遠な思想を図型で示す伝統は、占いの六四卦が孔子の周代に作られたことから、これも古来の表象文化。こんな背景を思えば、唐代禪僧の自在な言動の中に文字や図型の使用があっても、けっして不思議ではありません。例によって、まず万松による「示衆」。

「空中に絵や字を描こうとしても、それはムリ。ましてや、形を作り色彩をつけようとしてもダメ。誰がそんなムダ骨を折るんかね。○を書いて、いたずらな詮索にすぎん。先徳による道理があればそれにより、なければ前例を重んずべきだろう。」つまり、道を与えるには自分勝手なムダ足をふんではダメ、ちゃんと先徳が教えたこの道理や前例によるべきだ、という老婆親なのですね。つぎには、「本則」の大意です。

「僧が仰山にへいったいあなたは文字を知っていますか」の問いに、仰山「まあ、それなりに」。すると僧は右回りに一周し「これは何の字？」仰山が地上に十と書くと、今度は左回りに一周してまた「これは何の字？」仰山が卅字を書くと、僧がマルを書いてまた「何の字？」仰山は卅の周りをマルで囲んだ。そこで僧は山門の仁王尊のようなポーズをとる。それを見て仰山はじめて肯定し、僧の力量を証明した……」というおもしろいお話。

一見、落語の禪問答のような奇言奇行ですね。ところが、さにあらず。この一則は禪者が悟りの自由自在な境地で仏法を示しているのだ、とされています。事実、万松さんによる一句ごとのコメントは、いつもながらさすが。とはいえ、難句がありますね。「形声」と「転注」は漢字を構成する方法を六分類した中の二つで、前者は「草」のように形からきた文字、後者は意味が転用できる文字。また、本則中の「樓至」とは梵語のローシ仏で、号泣したり大笑したりしたという仏教の守護仏。この則は、修行のできた僧と仰山による仏法の真髄を競演しているのですが、その重要な要素は「卅」。これはいつたい記号か文字

か、おわかりですか。そう、れっきとした漢字で部首「十」の四画です。もともと梵語シリバツサで、古代インドでは吉祥を意味し、仏を敬礼する形を示し、逆の「卅」と書き

ました。の



慧寂が修行した大瀧山密印寺

ち中国に伝わり、唐の則天武后のときに音が「万」と定められたのです。つまり、卅はめでたく尊い文字なのですね。わが江戸時代には、宗門き

つての学僧として知られた卅山・道白禪師が出ています。

ですが、どんなに尊い字でも所詮は文字。掌中の至宝も死蔵ではなりません。樓至のように殺活自在のはたらきが大切。ですから私たちは、静坐により充電されたエネルギーを社会に向って大いに照達いたしましょう。

◆◆◆ 参禅会発足四〇周年記念行事第一弾 ◆◆◆

「眼蔵会」「記念講演会」 和合集力にて無事円成す！

龍泉院参禅会は、発足四〇周年を記念して、去る五月一四日（土）・一五日（日）の二日間、にわたって『眼蔵会』と『記念講演会』を開催いたしました。会員および一般参加者も多数上山し盛大裏に終了いたしました。

◆『眼蔵会』

・日時…五月一四日（土）一〇時～一七時

五月一五日（日）一〇時～一二時

・提唱…『正法眼蔵』『現成公案』

・講師…堂頭 椎名宏雄老師

・会場…龍泉院大悲殿

・参加者…五三名

◆『記念講演会』

・日時…五月一五日（日）一四時～一五時半

・演題…「縁の仏教」

・講師…曹洞宗総合研究センター所長、

駒澤大学教授 池田魯参先生

・会場…龍泉院大悲殿

・参加者…七〇名

以下、準備から実施にいたるまでの経緯を報告申し上げます。当参禅会では、平成二三年に発足四〇周年を迎えるに当たり、平成二二年二月に「四〇周年記念行事実行委員会（以下実行委員会と記す）」を組織しました。

実行委員会顧問 椎名宏雄老師

々 委員長 小畑節朗代表幹事

々 副委員長 五十嵐嗣郎

々 会計 刑部一郎

々 書記 杉浦上太郎

々 委員 中寫宏誠、添田昌弘、松

井隆、加藤孝、相澤善彦、

中村正市、小山斉、小畑

二郎、鈴木民雄、田上淳

一、遠藤昇 （二六名）

実行委員会では、平成二二年二月から平成二三年五月までの間、一三回の打合せ会を実施、記念行事等に関して検討し、決めて参りました。

【四〇周年記念行事内容】

一. 『眼蔵会』開催 五月一四・一五日

二. 『記念講演会』開催 五月一五日

三. 『第三回在家得度式』開催 一月三日

四. 「坐禅堂」建設 平成二四年落成目標

会員の皆さまには、平成二二年一月の月例参禅会において、記念行事の概略を説明した案内書を配布させていただき、この案内書には『眼蔵会』で椎名老師にご提唱いただきましたテーマの申込書も挟み込みました。

本年二月の参禅会では、『眼蔵会』および『記念講演会』の案内書（申込書付き）を配布いたしました。

第一弾の催事として、先ずは『眼蔵会』と『記念講演会』を成功させるべく、万全を計りました。会員・縁者への案内の徹底。仏教関係紙誌および三大新聞・タウン紙誌等への記事掲載依頼。精進弁当の試食・検討。すべての配役の検討・決定。開講式・閉講式および会

場設営の予行演習。細部にわたって全員で知恵を出し、汗をかきました。

五月一四日・一五日の両日は、事前申込みをお願いしたことから、何の混乱もなく、肃々と着座いただきました。会場内は熱弁を振るわれる講師と熱心な受講者が一体となったまさに「感応道交」の世界が広がりました。

池田先生には、夕刻からの有志による懇親



池田魯参先生と記念講演会参加の方々

会にもお付合いいただき望外の喜びでした。本催事が、皆さまにとってよい節付けになりますように。
(文責：杉浦上太郎)

龍泉院参禅会四〇周年を迎え

「新しい僧伽」の創生に向かつて

松戸市 小畑 節朗

『明珠』最終頁に「龍泉院参禅会簡介」が載っておりますが、ご承知の通り、毎月第四日曜に変わることなく、この差定通り行われております。

新本堂が昭和五七年に完成する前は、二百年数十年を経た萱葺きの本堂で、参加者五、六人程で行われておりましたが、差定は其の当時作成されたものが引き継がれています。

ある会員のお一人から「提唱後の座談喫茶は、坐禅に関りの無い社交ではないか、沢木老師の流れを汲む内山興正老師がそのように言われている。坐禅と提唱だけで良いのではないか」との指摘を受けました。偶さか京都に行くことがあり、意を決し宇治木幡に隠棲されておられた内山老師をお尋ねし、お聞きしました。

すると内山老師より、「それは安泰寺で行っていた接心のことを言ったので、一日一四時間の坐禅を五日間、これを一炷として行っているので、始めから終わりまで一続きとして行うことが望ましく、途中で来客の添菜などでお茶など行くと一続きでなくなる。無言で五日間徹することが大事だと言ったのである。在家中心の月一回の参禅では、提唱後にお茶を飲みながら話をするのは、一向に差し支えないのでは。」とのお示しがあり、今のような差定が定着して今日に至っております。

と言うように、少ない人数でも大勢になっても、坐禅に向き合う姿勢は百人百様で、月一回では物足りないと感じる方も居られ、大野市の宝慶寺さんの接心に一一年も連続して出かけられ、またそれに続く方もおられます。出家得度して永平寺で四年間修行の後、立職して市原市の一寺の住職になられた方もおられます。また他の参禅道場に移られた方もおられます。

とにかく毎月第四日曜、休み無く、来るを拒まず去るを追わず四〇年、縁あって一回でも坐禅に親しんだ人は、数えたことはありませんが、千人を超えるのではなからうか。此中一人でも何処かで坐禅を続けているとすれ

ば、誠に有難いことであり嬉しいことであります。

今回の四〇周年行事は、堂頭老師による「眼蔵会」と池田魯参先生の「講演会」の二つを、五月に盛大裏に無事円成し、一月三日「在家得度式」を厳修するべく、鋭意準備を進めているところ です。

また何と言っても四〇周年記念行事の最大事業は「坐禅堂」の建立です。八月二八日に開催した第一六回建設委員会で、建設地の整地を地元の石井造園さんに正式にお願いし、今年一二月までに完了する予定です。本体はやはり地元の工匠堂さんをお願いし、見積りを現在検討中ですが、平成二四年春の着工を目指しております。

それにつけても、未曾有の東日本大震災・原発事故による被害の復旧・復興の真つ只中にもかかわらず、坐禅堂建立の勸募に応じて頂いた皆様には何とお礼を申し上げれば良いか分かりません。勸募金もお蔭様で何とか目標額に近くなりました。只只感謝申し上げる次第でございます。

今春、「坐禅堂建立浄財勸募のお願い」で申し上げますのは、道元禪師が教えられた「自未得度先度他」、即ち、至らぬ自分も努力

しつつ、その過程で他人には一歩先に手を差しのべよう」を基本理念として、将来を背負う若者たちの研修道場であると同時に、また彼らを指導する中高年の生涯研修的な場を建立するものであります。

今、市場経済の進展のさなか、欲望肯定の競争社会、お金の有る無しで人を判断し、お金を手に入れる手段の巧拙で人を評価する世の中となつていますが、坐禅堂はその競争社会から逃避する場所ではありません。それは「本来の自己に出会う行（自己の生命に出会う行）」である坐禅」を行つる場所であります。道元禪師は『正法眼蔵』『三昧王三昧』の巻で「坐の尽界と余の尽界と、はるかにことなり。この道理をあきらめて、佛祖の發心・修行・菩提・涅槃を弁肯するなり。」と仰せになられています。

余の尽界とは坐禅以外のところにひらかれている世界、坐の尽界とは坐禅をしたところにひらかれる世界です（内山興正『自己』より）。また、坐の尽界はいつでもどこでもだれでも、行ずれば必ずひらかれる世界であると、道元禪師は『普勸坐禅儀』でもお示しになられております。

大変俗な言い方ですが、坐の尽界」では

百万円も一円も同価値ですが、前に述べた競争社会である「余の尽界」では、百万円は一円の百万倍としての価値を規定している世界です。坐禅堂建立の勸募にあたっては、競争社会にありながらも、「坐の尽界」の行持だと思つています。

さて坐禅堂を坐禅堂として、今後十年後いや百年後に坐禅堂としての光をいかに輝かせることが出来るかを考えるのが、四〇年を経た参禅会のこれからの課題だと思います。坐禅堂で坐蒲が埃にまみれている姿を見ないための道筋は、如何ということ です。

今「四弘誓願」の「衆生無辺誓願度」の堅固な地盤に、「修証一等、只管打坐」が行じられる、揺るぎない立派な「坐禅堂」が建てられようとしています。その日日の行持差定をいかにしたらよいでしょうか？

御座います。あの『典座教訓』一巻です。

特に最後のところの「三心」です。「喜心」（喜びのこころ）「老心」（母がわが子の面倒をみるこころ）「大心」（オモイエラバヌこころ）この「三心」を坐禅堂の運営の基本理念としては如何かと、考えるところであります（内山興正の『自己』による）。なお我が堂頭老師の道号を大心と称されるのも、誠に

故あるところかとも存じます。

これらのことは何も改めて申すまでもなく、今既に行っていることをただ再確認したに過ぎません。道友の松井さんがふと言われた「新しい僧伽^{サンガ}の創生」でもあります。堂頭椎名老師のご指導の下、僧俗併せた「新しい僧伽^{サンガ}創生」の場所としての「坐禅堂」が、今後の参禅会の輝きになることを信じて疑いません。妄言多謝

合掌

道元入宋求道『宝慶記』

著者にまみえ

取手市 三町 勲

「釈迦牟尼仏見明星悟道曰、我与大地有情同時成道」『伝光録』（首章）の仏教の原点から池田魯参先生の講演は始まりました。後段の一節が「この世は万物が深く縁に結ばれて成立つ仏の社会であることを示唆している」と。先生の熱弁に身振り手振りが加わって、熱心に聞き入る老若男女であふれる会場を熱気に包み込んでしまいました。

懷瑩筆写の『宝慶記』を池田先生は「道元の入宋求法ノート」と副題を付され、道元禅



身振り手振りが加わっての熱弁

師が如浄禅師のもとで折々に参問した数々の記録を解説されておられます。それを熱読しその中の三二条「風鈴頌」が私の赤心に焼きついています。

渾身似口掛虚空

不管東西南北風

一等与渠談般若

滴丁東了滴丁東

—池田先生訳—

全体を口にして虚空にかかる

風の向きなど頓着せず

無心に般若を説く

ティティン トン リヤン ティティン

トン

道元禅師がわが先師・古仏如浄が詠じたこの頌を讃嘆し『正法眼蔵』の「摩訶般若波羅蜜」の巻に引用され、

「この頌は仏祖正伝の智慧を談ずるものである。身をこぞつての智慧であり、他者をこぞつての智慧であり、自己をこぞつての他者であり、東西南北をこぞつてことごとく智慧である」と著わしておられます。

ご承知のように、『般若心経』の前半の「五蘊皆空」は「空・無」を説き、後半の「是大神咒、是大明咒、是无上咒、是无等等咒」の四咒の解釈は、先の「頌」にゆだねていると解釈されています。

最近、朝の散歩を励行しています。ふと目にとまった光景に足がそのまま釘付けになってしまいました。そこでいつも持ち歩いている手帳にその「滴」のイメージを書きとめた。

点滴微音聴澤畔

水紋如輪見平瀾

現成妙有清波裏

滴滴明珠浴日熙

—詩の意—

点滴 音は微かに澤畔に聴き、

水紋 輪の如く平瀾（さざなみ）を見る。

妙有（みょうう）現成す清波の裏（うち）、

滴滴として明珠を浴びて熙(かが)やく。
と、この世の限りなく幾重の縁が水の面の輪のように重なりあつて見え、それらの縁がお互いに傷付けたり、傷付いたりすることなく、法輪が広がって行く道理を語りかけてくれているのです。釘付けになった足もとに光明がさし、一顆明珠が見えてきました。誠に有難いことです。

龍泉院参禅会四〇周年記念行事「眼蔵会」・「記念講演会」で明日の修行の道を開いて下さった椎名堂頭・池田先生、また行事の諸役で奮闘された方々に唯々感謝、感謝の気持ちで一杯です。有難うございました。

合掌

森羅万象ありのまま

―「眼蔵会」に思う―

船橋市 阿部 史子

「眼蔵会」。この度、まだ聞いたことの無い曹洞宗の行事をまた一つ体験出来ました。この為の準備と円成には、椎名老師のご指導と幾人もの諸先輩・会友の方々のご尽力が有つてのことと感謝し、厚く御礼申し上げます。

眼蔵会当日、雨後の爽やかな本堂で、静か

な内に気合の入った開講式の後、大悲殿で開講。大悲殿は机が並べられ、約五〇名余の参学の徒で埋まっている様は、昔の学問所を思わせます。皆、姿勢を正し期待と緊張の空気の中、椎名老師のご提唱のお声が響きます。この時、私はふと道元禅師の仏教哲学の講義を受講している大学生に返ったような心境になりました。以前、永平寺へ受戒会の為に上山しましたが、毎年執り行われるという大本山永平寺の本講「眼蔵会」の光景はさぞかし厳肅なことでしょう。



昔の学問所を思わせる会場

ご提唱は『正法眼蔵』『現状公案』です。
「諸法ノ佛法ナル時節」、この眼前の森羅万象、すべての命がぶつ通しに真理をあらわしている。「偏界曾て蔵さず」。

「自己ヲワスルトイフハ萬法ニ證セラルルナリ、萬法ニ證セラルトイフハ自己ノ身心オヨヒ他己ノ身心ヲシテ脱落セシムルナリ」、自らののはからい、エゴを放れて大宇宙の息吹の中にすつぽりと入り一体となる。自分を忘れてエゴを捨て「おれがおれが」の思いが無となる時、おのずと証りがやって来るとお示し下さっています。

過去の『口宣』を改めて開いて見ると、平成一五年の一夜接心でこの一節をご老師が説いておられます。お釈迦様の生なまのお言葉「己こそ己のよるべ己によらずして何によるべきぞ」を示し、己について「自我でない自己」即ち『よく調えられし己』こそが素晴らしい。「自己を全部止めましょう！よく調えられし己、これに徹する！」と。

ご老師はご提唱下さる時「この天地いっぱいが真理をあらわしている」「この全身をあげて・・・」と、両手を胸の前に挙げ掌を大きく広げて宇宙を抱え込むが如きジェスチュアをされます。真剣且つ喜びに満ちたご表情



真剣且つ喜びに満ちたご表情で、法を説かれるご老師

で、法を説いて下さいます。

道元禪師は縦横無尽に喩を挙げて説き明かされているが、難解で格調高く文章は珠玉の如き表現に満ちている。それをご老師が分かり易く私達に熱く説き明かして下さいます。

ご提唱はなかなか難解で、すぐには私は消化できません。その時は少し内容が纏めたような気がしても又右から左へと忘れたり、文

字表現の難解さに捕われて頭は霧の中という有様になってしまいます。まるでなぞ解きのような「公案」といわれる禅問答の形で口伝えされる箇所は、お示しされて納得すると、情景が想像されて後まで印象深く残ります。

まだほんの聞きかじった程度しか知りませんが、「無言でたゞ扇をつかう禪師」、南岳禪師の「かわらを磨いて鏡になるか」や、最近では「優曇華」の巻にあった「拈華微笑」の公案など。日頃生活している中で、風や扇、一輪の庭の花などを眼にした時、ふっと思いついて「あっ、こういう事」と嬉しくなったり・・・単純な私です。

日頃の生活も事象のとらえ方、行動で禅的生活となるでしょう。汗だくになつての掃除、何度も洗濯物を抱えて階段を上がり下りしたり、ご飯作り、食器を洗う、他諸々。毎日毎日のどんなちつづけなことも「自分がすべき事を納得して」今行うとスツキリする。工夫もする。時にはぐずる自分が居て面倒だなあと思うことがあっても、自分の手足が動くから出来るんだ、メタボ対策にもなると思考回路を転換する。

見方を変えると苦も楽も全て表裏一体。感謝の気持ちちが湧く。この頃やっと、この心の

働きが愚鈍な私にも少し自然に出来るようになった気がします。「ものはすべて違ふ、違ふけど同じでもある。有るけど無い、無いけど有る」という中道的な位置で見ると客観視出来て、腹は立たずに「いろいろだなあ」と思う。日常の出来事、石ころだったり大岩だったり、一つひとつに出会いながら自分なりに精一杯に岩と取り組む。生きることそのものが坐禅と言えるように思います。

道元禪師の「遇一行修一行」という一句では、その時その場の仕事を全力をあげて取り組み勤めあげよと、お示しされています。ご老師は「一人ひとり人間として絶対な価値がある存在、光明である。その人しか出来ないことを持つて生まれ出する。それを行う為に生まれて来ているのです」と生きる意味をあたたく説き、それぞれの背中を時には厳しく又優しく押して下さいます。

今春、未曾有の天災、人災に見舞われたこの日本、私達はこの先、どう生きて行けば良いのか。現われている事柄の意味を常に深く己に問い掛ける姿勢を忘れてはならないと思います。今こそ人としての根っこをしっかりと根付かせ、調えられた己を求め、片寄らず生きる。「現成公案」が闇を照らす智慧・松

明なのだと思います。

「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて涼
しかりけり」

「現成公案」の巻を椎名老師からご提唱を
頂いた後こそ、道元禪師のお示し、お心が、
この御歌に凝縮されていると感銘を新たに致
しました。

以上、二日間に渡り連続して長時間『正法
眼蔵』を、力強くご提唱頂き「眼蔵会」を開
講して頂いたことに深く感謝申し上げ、拝聴
出来ました思いを記させて頂きました。

まだ、深遠な仏道の入口でジタバタしてお
りますが、師と仰ぐべきご老師と出会え、参
禅会ではほとけ様のような行をされておられ
る諸先輩方、会友の皆様のおかげられつ、一
緒に「修証一等」の坐禅を目指したいと思っ
ております。

この度は本当に有難うございました。

眼蔵会に参加して

柏市 西村よしみ

参禅会発足四〇周年記念の「眼蔵会」にお
けるご老師のご提唱、池田魯参先生の講演会
において、深いお言葉に接することができ大

変感謝しています。

今回ご提唱の「現成公案」は、学生の頃ゼ
ミで読んだことがありました。それで、眼蔵
会の前日、岩波の『道元』を書棚から探し出
し、「現成公案」を再び目にしました。「現
成公案は」数多くの喩えがあり、具体的に
書かれているところは分かり易いが、その他
の部分はまるで分からない。」と書かれてい
る当時の拙いコメントを見ながら、必死に格
闘していたことを思い出しました。

しかし、今回はご老師のご提唱を聞いてい
るうちに、難しい「その他の部分」も、ほん
の僅かですがストンと腹に入っていくような
気がいたしました。また、「華ハ愛惜ニチリ、
艸ハ棄嫌ニオフルノミナリ」とか「灰・薪」
の喩えについても、哀しみ、悔恨などの想い
とともに様々な場面が思い出されてくるの
は、やはり年を取ったからでしょうか。

特に今年は「震災」があり、ニュースや新
聞で報道される映像を繰り返し見るにつれ、
「現成」という言葉が頭の隅から離れなくな
っていました。

その中で、強い印象を残した三つの映像を
中心に、ご老師の提唱を聞きながら考えたこ
とについてまとめてみたいと思います。

NHKこころの時代「瓦礫の中から言葉
を」^①は、作家辺見庸が故郷石巻の喪失と死
者に向き合う姿を語った番組です。辺見庸の
語りもとても深いものでしたが、私は番組中
頃の映像に衝撃を受けました。

港に浮かぶ漁船が陸地に向かって流されて
います。河口近くでは、逆流する激しい流れ
に舵を失い、波に翻弄され、互いに衝突しな
がら、漁船の数は増えていきます。

突然、鳥が一羽、画面を斜めに飛び去って



開講式で般若心経を誦読される西村さん（右から二人目）

いきました。そして、次から次へと二〇数羽の群れが過ぎ去りました。鈍色の海に雪が降りそそぎ、モノクロームの画面から音は聞こえてきません。鳥の群れは何事もないかのよう、怒濤とぶつかり合う漁船の衝撃、破壊と津波にのまれる人の叫びを下に、飛び去って行ったのです。

水を極め、空を極めようとする人の営みが自然の脅威の前に脆くも崩れ去っていく様相と「鳥」の群れが、ご老師の提唱を聞きながら鮮やかな記憶としてよみがえっていました。次の二枚は朝日新聞の写真で、ご覧になった方も多いのではないかと思います。

四十九日の合同式に母親と共に参列している五才ぐらいの男の子の写真^②です。遺影を胸に、小さな体、全身全霊で父親の死を嘆き悲しんでいるものでした。「パパー」と大きく泣き叫ぶ声が聞こえます。頬に伝わる涙の跡も見えるようです。

「得一法通一法ナリ、遇一行修一行ナリ」について、ご老師は、「その場その場で出会ったこと、大自然の風光に接した時、それを全身で受け止めること。その時その時に全力を挙げて打ち込むこと」とお話になりました。まさに、男の子は哀しみを全身で受け止め、

全力を挙げ泣いています。彼のうちに哀しみそのものが「現成」^③しているように思いました。

最後は、難を逃れた梅の花の写真です。「それでも花は咲く」^④というタイトルがつけられています。住宅の七割が押し流され何もなくなった市街地を背景に梅の花が綻び始めています。シャッターを押すカメラマンの感動と希望が伝わってきます。そして、私の心も安らかさを取り戻しました。

ご老師は「現成」について「眼前にあるものが絶対の真理として現れること」と話されました。まさに、その「現成」が一瞬のうちに切り取られた梅の花に具現しているように感じました。道元は、「梅華」において如浄禪師を引き、「梅開に帶せられて万春はやし。万春は梅裏一両の功德なり。一春なほよく万物を感新ならしむ。万法を元正ならしむ。」^④と述べています。この写真を見て、春の到来と再生を心から願い、喜んだ人は多かったのではないかと思います。

私たちの繁栄が拠って立ってきたものが、自然の前にはあまりにも脆弱で、巨大な水の壁に飲み込まれました。しかし、「自然は怖い。だけど今まで海の恩恵で生きて来たのだから、これからも海で生きていく。」という

漁師の言葉に日本人のしなやかな強さを見ました。

① 辺見 庸 四月二十四日(日) NHK

「この時代の 瓦礫の中から言葉を」 YouTubeで検索すると見るができます。三分ぐらいのところです。

② 朝日新聞 日時は分かりません。

③ 越田省吾撮影 朝日新聞 三月三〇日 夕刊「それでも花は咲く」

<http://oganekotoe.exblog.jp/1179> ブログ「被災地の復興を祈り」にも写真がありました。

④ 寺田透、水野弥穂子(校注) 1970 日本思想体系13『道元』下「梅華」岩波書店

眼蔵会に臨んで

世田谷区 清野 宏道

去る新緑豊かな五月の初旬、龍泉院様の参禅会員である五十嵐氏よりお誘いを賜り、差し出がましくもこの度の眼蔵会に臨席させて頂きました。

一四日・一五日の二日間に渡り、椎名老師

の御提唱に臨ませて頂いたわけでございますが、恥ずかしながら私は今まで本山以外の眼蔵会を経験したことがありませんでした。この度、隅々まで作務の行き届いた御山内の風光を觀しながら謹聴した「現成公案」巻の御提唱は、まさに清浄の一風を我が身心に受けた思いであり、道元禪師様が「無情說法」巻の冒頭で「說法於說法するは、仏祖附屬於佛祖の見成公案なり。この說法は法説なり」と説き示したところが眼前の事実として鮮明に現れたようでした。そうした実感を含め、眼蔵会から二ヶ月が過ぎた今日、改めて過日の会座を振り返ると、やはり『正法眼蔵』の諸巻は参学人に向けて道元禪師様が説き示した「示衆」に他ならないと切に感じるのです。

ところで、『正法眼蔵』は、よく「辦・現・仏」と言われます。これは『辨道話』・「現成公案」巻・「仏性」巻を中心として『正法眼蔵』の真髓を学ぶ」という伝統的な参究の在り方を指して言われることですが、浅学の私はこの度の眼蔵会まで「現成公案」巻を深く参学したことがありませんでした。少なからず、自分なりに味読し、学術的な考察も試みてはおりましたが、確かな見識に照らして自身の理解を検討したことがなかったのです。

そうであつたため、この度の御提唱の中で特に「仏道をならふといふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするなるなり。自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり。万法に証せらるるといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり」という一段に対する御老師の解釈には深く感じ入りました。この部分は、その前に「自己をはこびて万法を修証するを迷とす、万法すすみて自己を修証するはさとりな



池田魯参先生の熱弁を熱心に聴講する参学者

り」とある説示を下敷きとして解釈しなければならぬと御老師が決定的な視点を示された時、今まで混沌としていたものがスッと清らかになるような、えも言われぬ感覚がありました。その時、道元禪師様が『辨道話』の初めで「この法は人人の分上ゆたかにそなはれりといへども、いまだ修せざるにはあらはれず、証せざるにはうるることなし」と説いておられるところと「現成公案」巻の全体が直に結んだのです。正しく、我々は常に仏法に照らされ、仏縁によって生かされてることを銘記しながら、日々を歩まなければならないと、つくづく実感致しました。

求めていた『正法眼蔵』の一卷を集中的に参究させて頂けたこともさることながら、禅研究の泰斗である椎名老師の綿密な解釈を集中的に拝聴させて頂けることなど、そうあることではございません。そうした意味でこの度は千載一遇の機に恵まれた思いでした。癒しの詩人と呼ばれた故坂村真民氏が「念ずれば花ひらく」と示されたように、一心に念ずるように日々精進していれば自ずと道は開かれるものだと、深く感受した次第です。

二日目の午後は、駒澤大学教授の池田魯参先生による「縁の仏教」と題した記念講演会

でした。池田先生は、はじめに長谷川耀氏の『震災歌集』から「かりそめに死者二万人などといふなかれ、親あり子ありはらからあるを」という詩を引かれ、後に残った者は、震災によって亡くなられた方々の一人ひとりに具わっていたであろう何ものにも代え難い熱い思い出を受け止め、そうした人々の死を悼む必要があるのではないかと言われました。そして、以前は「現代日本は無縁社会」と言われていたけれども、震災の後、多くの人が「被災された方々に対して自分は何ができるか」ということを考えたり、積極的にボランティア活動を行っている様子を見ると、日本は確固とした縁・有縁の社会であると明言されました。

さらに先生は、そうした「縁」の在り方について、まず、釈迦様が「縁」の理法を説き開いたことを示されました。次いで、釈迦成道の景色である「我と大地有情同時成道」という文の「与」の字を「縁」と解釈した瑩山禅師様の見識や、道元禅師様の「春は花夏ほととぎす秋は月、冬雪さえてすずしかりけり」「峰の色谷の響も皆ながら、吾が釈迦牟尼の声と姿」という詩を採り挙げて、「縁」が「有（あるもの・みえるもの）」や「無（な

いもの・みえないもの）」を超えて働くのであり、我々が仏との縁によって繋がっていることを説き示されました。そうした御講演を拝聴し、これからは「縁」の認識で人間・社会を考えていかなければならないと改めて気付かされた次第です。

池田先生の御講演は椎名老師の御提唱に引き続いて行われたわけですが、両師が協議をしていないにも関わらず、その説くところがあまりにも通じていたことには驚かされました。道元禅師様の「春は花」の詩を引かれて御垂示されていたこともそうですが、特に「仏法・縁に導かれる」という見解を共通の視座とされていたところには感銘を受けました。その点を考えると、これこそ仏道に携わる我々が銘記すべき一つの真実であるように思えてなりません。半世紀以上、仏教を参究されてきた両師の御教示が根底で通じ合っていることを目の当たりにし、道元禅師様が自身の法を「正伝の仏法」「釈尊単伝の法」と立言されたところが少しばかり明瞭になったように思います。

この度、私が眼蔵会に列席させて頂けたのも、そうした仏縁の賜と存じます。自己は良縁に育まれ、また多くの方々と良縁を結びな

がら日々を歩んでいることを弁え、他を想いながら自分自身が思慮深く生きなければならぬと深く心に刻んだ次第です。

歩むべき道の在り方を示して頂いた両師に感謝申し上げ、眼蔵会の所存とさせて頂きたく存じます。

一夜接心

『坐禪用心記』の ご提唱始まる

六月四日（土）午後二時から一夜接心が始まりました。今年は五月末に梅雨入りし、それ以降愚図ついた天候が続きましたが、前日から梅雨休みとなり、初日は吹く風も爽やかで、快適な一夜接心を過ごすことができました。

一炷目の坐禪の次のご提唱は、今年から瑩山紹瑾禅師が著わされた『坐禪用心記』となりました。坐禪に関しては、昨年の一夜接心でご提唱いただいた、道元禅師の『普勸坐禅儀』があります。大変格調が高く、坐禪の理念を高らかに説かれたものですが、坐禪の仕方や坐禅中に注意すべきことなどは、あまり触れていません。しかし『坐禪用心記』は坐禅の仕方や、坐禅中におこるさまざまな事柄



椎名老師と一夜接心参加者

について、どのように対応するか、懇切丁寧に書かれておられるとので、坐禅弁道するものには貴重な指導書となっています。これから三〇四年かけて一夜接心で読み解いていくことになっています。

二日目の四炷の坐禅も終わり中食となりましたが、典座さん渾身の力を注いだお齋に全員びっくり、大皿にはナント八品ものおかずが盛り付けられていました。

龍泉院さ始め、多くの方から添菜をいた

だいたので、おかずの種類も増えたそうですが、当日添菜として、家庭菜園で採れた野菜を持参された品もあり、典座さんは即興的にメニューを工夫していただいたそうです。ふだんから調理をされておられるので、このような技が発揮されるのだと思います。

中食の後の茶話会で三町さんから、「坐る、食う、寝る、トイレに行くなど、これら全てが龍泉院参禅会の文化を創っていることになっている。それに馴染めない人もいるかもしれないが、一夜接心などで醸しだされる龍泉院参禅会の文化が、坐禅堂建立へと繋がっているように思われる」と、感想を述べられました。ご老師からも、一夜接心には坐禅だけではなく、作務、提唱、法要など、あらゆる行が入っています。この行でつまれた徳を、自分のものだけに留めておくのではなく、弘く多くの方々にもお分けするように、とお言葉が最後にありました。

一夜接心に初参加して

八千代市 山本 聡

今回初めて一夜接心に参加させていただきました。感想を寄稿するよう依頼されました

ので感じた事を纏めてみたいと思います。

一夜接心のお話があった時は、お寺に泊まり込み七炷も坐るという事で、自分に出来るか正直不安でしたが、思いきって参加してみる事にしました。

上山して最初の一炷目、足を結跏趺坐に組み面壁すると普段の参禅会よりも引き締まった空気を感しました。老師の「最初からもそもそ動かない!」という一喝が堂内に響き、叱責するような警策の強い音に、「接心」というものの重みを感じました。

三炷、四炷と坐禅をしているとだんだん足が痛くなってきましたが、同行の皆様の微かな呼吸音や鳥の声、風の音を聞き、日が暮れるにつれて濃くなる堂内の陰影を見つめていると、不思議と澄んだ気持ちになってきました。初日最後の夜坐では、老師の打たれる止静鐘と放禅鐘の音も、励ますような優しい音に感じました。

二日目も足はやや痛かったのですが、結跏趺坐を崩す事なく、なんとか坐り通せました。坐禅の空間は何故か大変尊いものと感じます。自分も参禅している時はその空間の中の一要素であると、本当に自覚する事ができれば、自分を飾り付けようとして苦しまずに済

むのかなと思いました。私の坐禅はまだまだ足が痛かったり、眠かったりですが！

今回接心に初参加してみても食事という事についても改めて考えさせられました。典座さん方の料理は、美味しく色彩も美しく素晴らしいものでした。私は食事の作法には不慣れなので、皆さんのやるのを横目で見ながらでしたが、本当に食事を味わって食べるということを考えさせられました。

接心の二日間は大変充実した時間を過ごせたと思います。ご指導いただきました椎名老師、準備にあたられた幹事さん、典座さん、皆様ありがとうございました。

写真とこころ (三)

取手市 三町 勲

写真は共同作業を必要とすることがあります。それはモデル撮影です。モデル撮影には、モデルと撮影者の二人の同時作業が不可欠です。同時作業にはお互いの意思が働きます。そのお互いの意思をお互いが認め合わなければ秀作は生まれません。

一番大事なのはお互いの目線です。お互いは言葉でなく目線で語り合い意思疎通を図り

ながら、シャッターを切ります。モデルは常に写真機のレンズに向ってエールをおくり続けます。これを読み取りながら、撮影者は瞬時の顔の表情や手足の動き、指先の形に至るまで細かく動作の一瞬を掬い取って影像化します。これはまさに、禅道場における坐禅や作務、薬石の同時行を通して、諸仏が無言の中に黙々と創り上げていく道場固有の文化そのものです。これが修行の場では一番大事なことです。モデル撮影もそれと一脈通ずる処があります。

■ モデルと写真家で文化を創る

文化・芸術にはそれに相応しい環境が必要です。撮影場所や天候が環境をつくってくれます。その中でカメラアングルという撮影者の意思が働き写真のイメージを創り上げてい



きます。

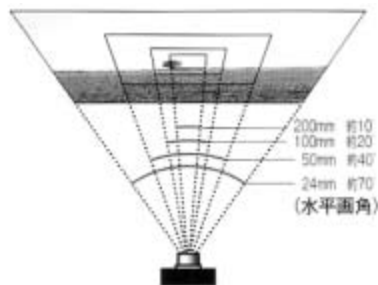
上の写真は古刹の右上の梵鐘とモデルとの対比が新鮮な空気の中に清潔さを創り出します。手の指先の無心に梵鐘を誘うような優し いしぐさが、作品を見る人の目を先ず引き付けます。

これこそがモデルと撮影者が創り出す無心の中の合作です(『写壇太陽』撮影会金賞受賞作品)。

■ 広角レンズで大胆に狙う

一眼レフのカメラでは三種類のレンズを使いこなすことが基本になります。

一般的に、(図1)「焦点距離による画角の変化」に示すように、標準レンズでは水平画角は約四〇度で、焦点距離(カメラの造形面からレンズまでの距離)は五〇ミリです。



ところが、広角レンズでは水平画角は約七〇度で、焦点距離は二四ミリです。

では、広角と標準で撮った写真はどんな違いがあるのか。先の古刹の作品は標準レンズで撮ったものです。この作品では雰囲気を大事にしたもので、標準レンズで表現できます。

しかし、次の高層ビルを背景にしたモデル撮影では、魅力的な写真にするにはひと工夫必要になります。撮り方によっては、モデルが高層ビルに押しつぶされて死んでしまいます。こんな時に広角レンズが機能を発揮して呉れるのです。

モデルの膝下から広角レンズであおって大胆に撮ることで、可愛いモデルが完全に主役になれるのです（『写壇太陽』撮影会銀賞受賞作品）。



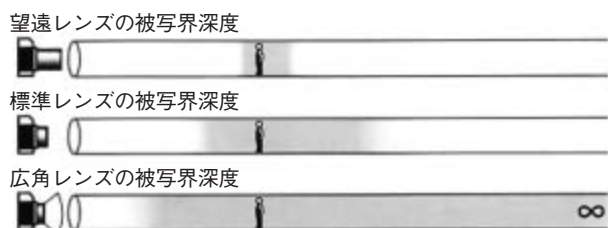
■ 広角で被写界深度の深い特徴を生かす

広角レンズで撮った写真は被写界深度が深

い作品になります。（図2）「焦点距離と被写界深度」に示すように、被写体（この図では人物）にピントを合せて撮ると、被写界深度（ピントの合う範囲）は薄く塗りつぶした部分になります。つまり、近くから遠くまではっきりと影像が撮り込めます。従って、上の作品の様にモデルと背景のビルが立体的に描写できます。

■ カメラの絞りは一杯に絞り込む

望遠レンズでは水平画角は約一〇度で、焦



（図2）焦点距離と被写界深度

点距離は二百ミリ程度です。更に被写界深度が浅いので被写体の近い範囲でも映像がぼけ気味になります。それを補うには、シャッターの絞りをウンと絞り込みます。

下のモデル撮影では絞りは二まで絞り込んであります。



髪の毛一本一本まではっきりと光って見えます。さらに背景のビルの窓まで明瞭に写し出されています。そこで作品全体の雰囲気を引き締まってきます。（『写壇太陽』撮影会銀賞受賞作品）。

『写壇太陽』とは私が所属する写真クラブです。西新宿の小さなマンションの一室が我々の道場です。六〇歳を超える会員（二百名）がおにぎりを食べながら写真修行に励みます。そこに一つの文化が芽生えます。奢らず、身の丈に合った環境が作られています。段々歳を重ねてくると、慎ましかな老後の生活を癒してくれます。そこで銀だ、金だとい子どもの世界が蘇えるひとときが、若返りを誘います。

（次回に続く）

◆◆会員便り◆◆

●会員の杉浦さんが坐禅堂建立勸募お願いのポスターを、パソコンのスキルを駆使して作成され、本堂前や観音堂の玄関などに掲示されています。現在このポスターを龍泉院以外でも掲載して、広く勸募をお願いしているところです。

●四〇周年記念行事第二弾として

第三回在家得度式が一月三日(祝)に行われます。得度希望者は現在約二〇名です。前回、前々回とも椎名宏雄老師が戒師様を勤められ、厳肅な雰囲気の中で、受戒者はより一層仏道に精進しよう

と心に誓いました。今回得度を受けられない方も、厳肅な在家得度式に列席され、受戒者と共に仏道を深められることを願います。

龍泉院参禅会簡介

〔定例参禅会〕

・日時 毎月第四日曜九時(初参加の方は八時半)

・坐禅 口宣、坐禅、経行、坐禅の順

(坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分)

・講義 木版三通、開経偈、『正法眼蔵』提唱

・座談 自己紹介・喫茶・座談、正午解散

・参加資格 年齢、性別など一切不問、初心者には懇切に指導

・会費 無料

〔年間行事〕

・一夜接心 本年は六月四・五日、七炷の坐禅と提唱等

・成道会 本年は二月四日、坐禅・法要・問答・法話・点心等

・他の行事 涅槃会(二月一五日)、花祭り(四月八日)、施食会

(八月一六日)手伝い、歳末煤払い(一二月例会後)

・作務 毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等

・刊行物 『明珠』(四月八日と一〇月五日発行)、『口宣』(年一回)

【ウェブサイト <http://www.ryusenin.org/>】『明珠』『口宣』のバック

ナンバーがご覧になれます。

沼南雑誌記

【定例参禅会・年間行事】

(一) 内は座談の司会者

平成二三年

●三月二七日 二六名

(相澤 善彦氏)

●四月八日 一一名

花祭り

●四月二四日 三二名

(小畑 二郎氏)

●五月一四・一五日 五三名

坐禅・提唱後・筍掘り

眼蔵会

●五月一五日 七〇名

記念講演会

於 龍泉院大悲殿

講師 駒澤大学教授

池田魯参先生

●五月二二日 二六名

(小山 齊氏)

●六月四・五日 二二名

一夜接心

幹事 小畑 節朗氏

添田 昌弘氏

遠藤 昇氏

●六月二六日 二九名

(細川 泰一氏)

●七月二四日 二九名

(松井 隆氏)

●八月一六日 一一名

施食会

法話 大長院住職

●八月二八日 三一名

小早川浩大老師

(美川 恒子氏)

【奉仕作務】

三月二二日(一名)、一八日(二名)

四月一日(四名)、九日(一名)

一五日(三名)

五月 六日(三名)、一二日(一名)

一九日(二名)、二〇日(四名)

六月 三日(三名)、一一日(二名)

一二日(一名)、二〇日(一名)

七月 一日(一名)、九日(一名)

一五日(三名)

八月 五日(四名)、一二日(一名)

一九日(三名)

九月 二日(三名)、一〇日(四名)

▼東日本震災による死者は九月九日現在、一五七八〇人、行方不明者は四一二二人に上る。亡くなられた方のご冥福をお祈りし、行方不明者の方が早く発見されることを願います。又今月は台風一二号で百人を超す死者・行方不明者がました。この半年「災害列島」日本を痛いほど見せつけられたが、野田新内閣が復興支援策を迅速かつ強力に推進されることを期待しています。(秀嗣)